

第4表. 収量調査(上果数)1956

品種 または系統	6 月		7 月			8 月	計	1株当り 平均
	中	下	上	中	下	上		
山交7号	22	50	78	83	75	12	320	20.6
相模半白	—	—	64	99	90	20	273	17.1
24 ~ 26	39	45	71	63	45	16	279	17.4
刈羽	33	50	93	73	58	19	326	20.4
新津節成	33	44	81	59	54	17	288	18.0
山形在来(堀込系)	29	45	91	72	58	13	308	19.3
四季節成(F <sub>1</sub> )	9	52	135	83	58	15	352	22.0
長日落合(F <sub>1</sub> )	—	46	107	93	46	15	307	19.2
花農交配300号(F <sub>1</sub> )	13	36	128	100	57	17	351	21.9

注: 1区4.97m<sup>2</sup> (16株)

## 東北地方の玉葱畑に対する 除草剤の利用について

水越洋三・富樫伝悦

(秋田県農試)

### 1. 緒言

玉葱の除草剤としてC<sub>l</sub>I<sub>P</sub>Cはその出現と同時に安全に使用出来るものといわれ、実用化もかなり進んでいるようである。しかしその除草体系についての検討はほとんどみられない。筆者らは昭和31年来、苗床と本圃での除草剤の使用方法について試験を行ってきたが、一応の結論を得たので概要を報告する。

### 2. 試験方法

#### 1. 苗床試験(昭33)

播種期 8月29日

播種量 1m<sup>2</sup>当り2g. 散播.

除草剤の種類及び散布量 C<sub>l</sub>I<sub>P</sub>C 1m<sup>2</sup>当り0.3g

#### (1) 覆土の厚さと葉害

播種後覆土の厚さを普通(約7mm)・倍量(約14mm)の二通りにし、直ちにC<sub>l</sub>I<sub>P</sub>Cの散布を行った。

#### (2) 手取り除草と散布回数

番号	試験区名	備考
1.	無散布慣行除草区	手取り除草(慣行除草)
2.	1回散布無除草区	9月24日
3.	" 手取り除草区	1回散布……播種直後
4.	2回散布無除草区	2回散布……播種直後
5.	" 手取り除草区	2回散布……手取り除草後

#### (3) 生育中の土入れと葉害

9月25日手取り除草後廢床々土を約8mmの厚さに入れ、無土入れを対照としてC<sub>l</sub>I<sub>P</sub>Cを散布した。

### 2. 本圃試験

#### (1) 散布時期と回数について(昭32)

番号	試験区名	備考
1.	無散布手取り除草区	定植後……10月26日
2.	定植後1回散布区	越冬前……12月4日
3.	越冬前1回散布区	越冬後……4月24日
4.	越冬後1回散布区	5月散布……5月23日
5.	越冬前及び5月散布区	C <sub>l</sub> I <sub>P</sub> C 10a当り300g
6.	越冬前後及び5月散布区	定植期 10月22日

#### (2) 5月散布の適期について(昭33)

11月23日(越冬前)及び4月8日(越冬後)を共通とし、それに5月10日・20日・30日のそれぞれを組合せた区を設け、各回10a当り300gのC<sub>l</sub>I<sub>P</sub>Cを散布した。(定植は10月31日)。

#### (3) 除草剤の種類について(昭33)

供試薬剤名及び10a当り散布量

C<sub>l</sub>I<sub>P</sub>C 300g・CMU 50g・CMU 75g・DCM U50g・DCMU 75g・CAT 75g・CAT 100g.

散布時期及び回数

11月23日・4月8日・5月20日の3回。

耕種法は(2)と同じい。

3. 結果と考察

苗床で播種時の倍量覆土は第1表にみられるように、C $\ell$ IPCの薬害を軽減することが出来るようである。

第1表. 覆土の量と播種後27日目の苗の生育

試験区	項目	30cm平方	同 比	標準率	草 丈
		苗立数			
		本			cm
	普通覆土無散布区	35.0	100		13.6
	" 散布区	29.0	83		13.1
	倍量覆土無散布区	32.3	92		14.0
	" 散布区	31.0	89		13.2

次に苗床終期まで除草効果をあげるための散布回数と手取り除草の組合せについては、ノゲシ・ノボロギク・イヌガラシ等のC $\ell$ IPCに強い抵抗性を有する草種の多い所では、播種直後散布に9月下旬頃の手取り除草を併用しなければならない。一方スズメノカタビラ・スベリヒユ等の優占している所では、2回の散布で除草の目的が達せられるものと思われる。なお生育中の散布に際し

ては、土入れを行うことによって除草剤による苗の生育抑制を軽減する。土入れは追肥を兼ねて行うのが望ましい。

本圃では越冬前・越冬後及び5月の3回に亘る除草剤散布によって、全期間全然手取り除草の必要がない。5月散布の適期は20日頃と考えられる。10日の散布ではスベリヒユの抑制がやや不確実であり、30日の散布ではメヒシバの発生がやや多くなるようである。

除草剤の種類ではCMU・DCMUの殺草力が強く、C $\ell$ IPCがそれに続き、CATはやや劣る。玉葱の生育にはCMU・DCMUの影響がみられ、生育最盛期の草丈が2~3cm低い。収量にはCMUの影響がやや大きく、25%の減収となった。減収程度の小さいのはC $\ell$ IPC散布区(7%)及びDCMU50g散布区(9%)である。以上のことから次のように考えられる。CMUは殺草力がすぐれているが収量にやや大きい影響を及ぼし、CATは殺草力が弱いので不適当である。C $\ell$ IPC・DCMU(50g)が実的にすぐれている。

ネギ苗床における除草剤の使用法に関する試験

富 樫 伝 悦・石 井 伊 佐 男

(秋 田 県 農 試)

1. 緒 言

秋田県はネギの苗床期間が4月中旬から7月中旬までの約90日間で、この期間の除草はほとんど手取りによって行われ、相当の労力を費している関係から、ネギ苗床に対する除草剤の利用が強く要望されていた。

しかし、C $\ell$ IPCを使用した場合、除草効果は顕著であるが薬害も大きかった。

この薬害を軽減するため、薬剤処理の時期を播種直後及び生育初期とし、播種直後処理には覆土の量・生育初期の処理には土入れの量を変えてC $\ell$ IPCの薬害防止効果を試験した。

第1表. 試験区と処理方法

試験区	処理時期	土の厚さ	除 草 剤 散 布		摘 要
			C $\ell$ IPC	無 散 布	
I	播種直後	覆土 3 mm	○	○(標準)	播 種 期 5月29日 C $\ell$ IPC散布 播種直後(a当り30g水20 $\ell$ ) 播 種 量 1m <sup>2</sup> 当り2.4g(約1,000粒) 1区面積区制 1m <sup>2</sup> 3区制 供 試 品 種 石倉一本太
		" 6 mm	○	○	
		" 9 mm	○	○	
II	生育初期	土入れ 0 mm	○	○(標準)	播 種 期 4月23日 C $\ell$ IPC散布 播種30日後(5月23日) 以外〔I〕試験と同じ
		" 5 mm	○	○	
		" 10mm	○	○	